

「(に)」

乍恐御返答申上口上之覚

一 大坂海部堀川町津国屋伊右衛門手前より後藤屋五左衛門  
 先年銀子借用仕返弁不埒付右伊右衛門より御訴詔  
 申上候付先達而私共御取調被仰付候得共手船  
 之支配付右伊右衛門手前より之借銀一錢も無之段野  
 波屋助次郎より申聞候間其段御返答申上置候處  
 亦々当夏右伊右衛門より及出訴申上候、則野波屋助次郎  
 後藤屋五左衛門儀対決被仰付、依之私義も会所へ  
 罷出右両人之詰刎始終承候處近年引縛候算  
 用及決白右之借銀手船之支配相拘り候段相違  
 無御座候様奉存候、然ル上者早速右五左衛門ニ而も登  
 坂為仕内済之手当テ仕度奉存候趣其節私并  
 助次郎義も御請書差上置候得共其後助次郎儀  
 一向頓着不仕奉恐入候、元来御用船相勤候儀者  
 助次郎と私義両人之発起ニ御座候處助次郎儀  
 鳥取表へ名前不相知もの故表向者私老人之願  
 主ニ被成素万事助次郎へ取捌相任せ置候間  
 大数之拝借米者不及申上、其外莫太之他借仕候而  
 船代之足銀ニ其併引渡候處後日至右之五左衛門より  
 差出候目録と助次郎より船代銀等申聞セ候とハ大ニ  
 銀高齟齬寔以助次郎義者縁相之ものニ御座候へ者  
 御用太切ニ実正之取作舞吳候様奉存候處船代銀  
 之辻と拝借米并當時私引受ニ罷成候他借之銀  
 高と引競候得者格別助次郎より之出銀も無御座様  
 相見へ申候、然ル處纔ニ両三年御用相勤助次郎儀  
 至極及困窮難渋之体ニ申立御上納之品不埒仕  
 置私へ当惑為仕候程之儀ニ御座候得者銀高之他借ハ  
 勿論初年より一向打捨不埒仕候儀者助次郎最初より  
 作略而已を相考其身より者出銀不仕様取計之心  
 組と奉存候、剩支配人共へ者他所ニ而借用銀等為仕  
 度々御役所へ奉掛御面倒義も是全以助次郎  
 不取作舞之儀千万奉恐入候、且又此度右之差別  
 片時も早く速ニ内済仕候様稠敷被仰付候趣

私儀者幾重ニも奉畏候得共助次郎儀自分勝手之

御返答申上候由、尤九右衛門代五左衛門と名前有之候間

何様私より及差別候様被仰出候段奉畏候得共乍恐

奉申上候、助次郎と私儀者御手先之奉蒙御裁許候

ものニ御座様得者万端宜被為聞召分被為下候様

奉願上候、誠以助次郎江ハ最初より大数之拝借米

并莫太成他借銀等迄も船代銀之手当テニ引渡

置候處両品彼是諸算用不埒仕私老人之及瀆候

様ニ取作舞置其必至之難詰之体ニ申立一向

何も頓着不仕候縱令手船不運ニ御座候間御米積

請候而も助次郎德用ニ仕候訣も無御座哉ニ者奉存候

得共蒙御蔭候時節ニ至候ハ、其身ハ格別之出趣

も不仕手振同様ニ而德分ニ者決而損失不仕様之才覺

と奉存候、右等之不実之致方ニ御座候殊更先達而

御取調之節助次郎儀も内済之御請書差出置候

儀ニ御座候間只今ニ至如何御断申上候共元来津国屋

伊右衛門手前之差別ニ不限莫太成上納之筋も私老人

之引受ニ罷成候上者御愁訴申上助次郎所持之品々貸

屋賃等迄も私江引受上納之足銀ニ仕度奉存候、尤

此儀も追而乍恐御歎申上度奉存候、何様右懸り合之

銀子両人より内済可仕道理者度々御取調之上及明

白候事ニ御座候間幾重も助次郎江稠敷被

仰付被為下候様奉願候、乍恐右御返答申上度

如斯御座候、以上

大谷九右衛門 (印)

寛政九年巳九月日

村瀬新右衛門様

伊丹代助様